

都道府県別賞一等

大切な家族のために

千葉県 習志野市立第六中学校 二学年

高山 悠莉

大きな病気やケガもなく、今は元気に暮らせている私にも過去には入院経験がある。

五歳の春のことだった。私はその夜のことを今でも鮮明に覚えている。夜中に突然、今まで経験したことのない吐き気やめまいがおそいかかり、私は立ち上がれなくなってしまった。母が朝になるのを待って私をかりつけ医のいる病院に連れていくと、すぐに大きな病院で検査する必要があると言われた。

そして私は、そのまま大きな病院で入院することになった。

しかし、色々な検査をしても原因が分からなかった。私は手足に力が入らず、立つことも出来ない状態が一週間ほど続いた。

その後、症状は回復して無事退院することが出来たものの、結局最後まで原因は分からなかった。

その頃の私はまだ幼かったので、入院するには付き添いの人が必要だった。そのため母は簡易ベッドで寝泊りをして、退院までずっと私のそばにいてくれた。私は何もかも初めてのことで、「これからどうなってしまうのだろうか。」ということや「母の仕事や家のことは大丈夫なのか。」という不安や恐怖で胸が押しつぶされそうになり、何度か泣いてしまった。一方母は、私につらい顔を見せず、「大丈夫。心配しないで。」

と言い、太陽のような笑顔で優しく見守ってくれた。それだけではない。母は入院中の私を元気づけるために絵本や塗り絵を買ってきてくれた。そうやって励まされるたびに、私の心は少し軽くなった。

母によると、私が突然入院した頃ちょうど兄も風邪で熱があり、父は出張中だったため、車を運転しない母はタクシーを使って家と病院を行き来していたそうだ。私は入院しても一日三百円しかかからない。しかし付き添いの母は食事代やタクシー代など、お金が必要なはずだ。もちろん兄の食事代もある。そのうえ検査をしても原因が分からず、風邪の兄の世話もしなければいけなかった母は、私以上に不安を抱えていたはずだ。

そんなときに家族の支えとなったのが、医療保険だったという。

「悠莉を医療保険に加入させていたおかげで家族の不安や負担を減らすことが出来て、すごく助かったのよ。」

と母は言った。絵本などを買えたのも母の思いやりはもちろん、保険に加入して

第62回中学生作文コンクール

いたことで金銭的な負担を減らせたからでもあった。

私は母にこのことを聞くまで、生命保険は私にはまだ関係ないものだと思っていた。自分も生命保険に加入していることすら、知らなかった。あのとき自分や私の家族も生命保険に助けられていたことを知って、生命保険は私たちの生活を陰ながらサポートしてくれている、大切な存在だと気づいた。

私を医療保険に加入させた理由が気になって母に聞いてみると、私が生まれる前、兄が一度入院したとき医療保険に加入していなかったためにお金の面で苦労した経験があり、「もしも」のときでもお金の心配をしなくて済むようにしたいと思っただけだそう。

病気やケガをしたときに、家族に肉体的、精神的負担をかけることに不安を抱えている人は少なくない。実際、家族への経済的負担も大きくなりやすい。

私が突然入院したように、病気やケガはいつ誰に起こるか分からない。生命保険はそんな「もしも」のときかけがえのない家族の生活を守る、一つの手段だ。だから私は生命保険についてもっと調べて、自分の家族にはこれからどんな保障が必要か真剣にリスクと向き合い、家族と話し合ってみようと思う。

また、将来は自分で生命保険に入って「もしも」のことが起きたとき、大切な家族の負担を少しでも減らせるようにしたい。今度は私が、

「大丈夫。心配しないで。」
と言えるように。